

第5回島田市教育環境適正化検討委員会【議事要録】

第5回島田市教育環境適正化検討委員会【議事概要】

日時：平成30年1月15日（月）15:00~16:30

場所：市役所第三委員会室

出席者

【委員】武井敦史（委員長）、福田秀樹、伊藤健太郎、藤本敏彦、良知克明、榛葉徹、小島忠光、畑浩、中村延也 【事務局】濱田和彦、畑活年、鈴木龍彦、田中義臣、渡辺武資、駒形進也、大石真司、和田英弥、廣田豊和

【傍聴人】5名

●【議事概略】

教育長よりあいさつ

本日は大変忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。今まで何度も話合いをしてきたが、基本的な立ち位置として、「子どもを一番に考えよう」ということで協議をしていただき大変感謝をしている。前回はa市にも視察に行っていた。今日はa市の報告と共に、a市の資料等を基に協議を進めていただくことになる。よろしくお願ひしたい。私たち事務サイドの立場では統合に掛ける時間は、たくさんの時間を丁寧に進めていかなければならないが一方で、ある程度時間の目途を立てていかないといけないと考えている。例えば第一小は校舎建築を控えている。第一小に統合をとという話が今までに出ていたので、少し話をさせていただくと、平成32年に基本設計、平成33年に実施設計、校舎完成は平成36年位を考えている。そうすると平成36年の後に統合すればいいということになるが、実は基本設計の前に文部科学省と補助金の話をしていかなければならない。そうすると平成31年には補助金の話がスタートする。平成31年には統合するのか、どういう形で統合するのが明確になってないと、国の方への補助金の申請が難しくなってくる。統合そのものは時間をかけて、子どもたちに負担がかからないようにやっていかなければならないが、校舎の方を考えるとあまりゆっくり考えることはできないと思う。話合いは時間を掛けなければならないが、タイムスケジュール的なことも考えていただきたい。平成31年6月に補助申請を提出していきたいと考えると、平成30年度の9月頃までには最終報告をつくりあげられればよいと思う。時間的な押さえを皆さんが共有する中で今日の話合いが実りあるものになればと考えている。

（委員長）

今、教育長の方から話があったとおり平成31年6月位に改築の話が具体的になる。そこから逆算すると平成30年度にはある程度、方針が立っていることが望ましい。平成31年度から動くためにはその前に予算等を確保しておく必要がある。そう考えると望ましいのは来年度前半までに、ある程度方向が出ていることになる。今までの適正化検討委員会の議論の流れを振り返ってみると、まず最初に問題を共有化し、在り方検討委員会の報告を受けて、問題を明確化してその上でどんな方向で検討していったらいいかということを考えて、各地域の方でこの委員会で進捗した状況を報告して、前回、a市に行ってどんな感じか見てきたところである。これからの作業の内容としては、本年度1回もしくは2回位会議を行い、中間報告という形でこれからどういう形で再編案を考えていくかというところの報告を出させていただく。それが出るとこの検討委員会の一つの報告になる。それ以降は主対象となる地域は北部地域

と湯日を中心とする南部地域になる。その2箇所できちんと議論をしていただき、その上で最終的に長期的にどういう形がいいのかということのを来年度具体的に議論していただき、それを受けてこの検討委員会としては最終的な方向性を考えていく。そういったスケジュールで動いていくことが必要と考えている。今日の議論は、最初にa市の視察報告をして、わからないことがあれば質問していただきたい。そして今日の議論の中心は、「島田市学校環境適正化委員会報告書構成と内容（案）」をご覧ください。全体の構成とその骨子について、皆さん方で意見交換していただき、次回には報告書の素案のたたき台が出てくるというように考えている。今日の議論はそのような形で進めていきたいがよろしいか。

（異論なし）

前回のa市の視察の報告について、皆さんいろいろ感じたと思うがいかがか。意見等あれば言ってほしい。

私、個人の印象として統廃合はどんなに準備していても難しい問題であるなど感じた。a市は随分計画を立ててやってきたが、それでも、やはり見直しが発生し体制を整えなおしている。島田にあっても、着実に想定されるリスクを考えながら委員会を進めていきたい。皆さんから何か感じたことなどあれば意見をお願いしたい。

（意見なし）

それでは「島田市学校環境適正化委員会報告書構成と内容（案）」をご覧ください。この1と2については割愛している。一番重要なポイントとして3の「基本的な考え方」を皆さんからの意見も踏まえた上で7つにまとめ、たたき台としてまとめた。ここについては協議をお願いしたい。簡単に説明すると1点目は学校環境の適正化を行うということは、その該当する地域だけが考えればよいというわけではなくて、まず島田市全体の問題であるということをお大前提に共有することである。そして全市ぐるみで対応していくことが求められる。2点目に市内全地域で教育がきちんと行われなければならない。一方で生活はゆとりをもって大らかな環境の中でできることが望ましい。こうしたバランスをきちんととれるような形を目指していく。3点目にいずれの地域も学校は適正な規模を図りつつ、それと同時に地域の子育てへの参画を拡大し、努力次第で地域も発展していけるような形を模索していく。そのための施策を考えていくということである。4点目にこれから再編対象となる地域に対して、政策的なインセンティブを付与する。新しい学校に移行するほど、子育てしやすくなるように努力していく。教育については先進的な地域になるように最大限の努力を行う。5点目に学校の児童生徒数が概ね20人を切るような場合には「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」を参酌の上、早期に再編を検討し適正化を図る。手引きには標準規模として小学校2学級、中学校4学級となっているが、それよりももう少し緩くてもいいだろう。1学級でも数十人いるのであれば、そのような学校は全国に山ほどあるので直ちに再編を考える訳ではない。ただし1学年20人切ると男女がそれぞれ10人ずつということになるので可能なスポーツなども限定されてくる。それを一つの目安にしたらどうか。一つの考え方として基準を考えていく。そして一方で長期的に更なる学校再編や小中一貫教育等、単に数が減っているから小さくしていけばいいのではなくて、むしろそれを利用して島田市の教育の特色づくりができるようにしていくという条件整備をおこなっていく必要がある。そして他市、他地域における学校再編のモデル地区になるような明るい計画が立てられることが望ましい。私の方からポイントを纏めて7点ほど出させてもらったが、これに加えることや取ること、文言を変えることがあれば、意見を出してほしい。

(委員)

自分の子どもは藤枝の瀬戸谷にいて小中一貫の教育を受けているが、藤枝市の他の地域の人は案外知らない。特定地域の人たちだけでなく、全市ぐるみというところがすごく大事かなと思う。6点目の特色は、何か変えることによって他の地域も変わってくるということが感じられればいいなと思う。

「生活はのびのび・・・」は、伊久美から通ってくる子が何分かかるのかと考えた時に「のびのび」という感覚はどうだろう。自分の感覚では朝5時に起こして弁当を作って・・・という感覚ではないのだろうが。

(委員長)

この表現は情緒的というか象徴的な表現であって、例えばバスを使って通えば当然通学時間がかかる訳だが、地域の学校の拠点は残ることになるので、そこで放課後とか土日に活動できるようになる。確かに通学等の時間は今よりはかかるようになるかもしれないが、その分地域と密着した活動も増えるし、子育ての環境としては送り迎えの通学途上の心配もなくなるので、全体としてはゆったりとした生活を目指していくということになる。あともう一つは地域の側からみて子どもだけでなく、地域の方々もちゃんと教育に関われるという環境が作れるかどうかそこが勝負だと思う。「のびのび」というのは単にゆとりがあるだけではなくて、生きがいを持って希望のある生活ができる。そのためには教育に関われる環境をつくっていくことである。この手の議論は他の地域を見ていると大体、先送りの議論が多い。今は何とか持つから、その状態を持たして延命措置をしようとしているが、私はそうではなくて長期的にもっと発展していくような形を今、模索しよう。おそらく市の財政状況は時を経つごとに厳しくなっていく。ということは先になればなるほど、地域を起こしていくだけのゆとりがなくなっていくのである。そうなる前に今ここで、打てる手を打っておこうというのが私のひとつの考え方である。もちろんいろいろな意見があると思うので、意見を出してほしい。

(委員)

教育長から最初に子どものことを第一に考えていくという話があった。そういう意味では、子どもの数というものはある程度必要になってくると思うが、地域の発展を可能な形にするというのは、非常に大切だと思う。以前参加者から「学校が失われることは地域の光を失う」ということを発言された。確かにそうであると思う。地域の元気の基は学校、子どもという一つの例ですが、昨日たまたまコミュニティの文化祭があったが、本校では風邪が流行っていて子どもの参加を見送った。そしたら集まる人も少なかったし、コミュニティの会長もしょんぼりして申し訳なく思った。やはり子ども、学校の存在が地域にとって大きなものである。そういう意味では、地域の発展といくことも考えていかなければならない。そしてそれがまた教育や地域のことが市の中でも精神的なものになっていく。中々難しいが少し前、地域の声を聞いたときに一小とか一中とかに統合されたときに、一小や一中であれば相賀の土地が宅地になれば今後、そこに住めば街中と繋がりがでてくるのかなと個人的には考えてみたりした。基本的な考えはこの文章に書いてあるとおりの方針でいきたいと思う。ひとつ聞きたいが、この考え方はa市へ視察にいった結果を踏まえた上でのことであれば、a市のどのような利点とか、良さを取り入れているのか具体的なものがわかればいいのだが。(自分は参加できなかったので)

(委員長)

この基本的な考え方は、視察の前の段階に作ったもので、視察をすればするほど見えてくることは、a市で作った再編案を市長と教育長が変わって見直して、もう一度一からやりなおしていたというこ

とである。a市の元の教育長は学校統廃合の著作まで書く人でいろいろなノウハウを持っていたが、地域とのすり合わせや同じ方向を向いていくという努力がやっているつもりでも、やっぱり不十分であった。可能な限り地域により沿って同じ方向性をもって納得できるような形で進めていくということが必要である。島田市の場合は、前の委員会から長い年月をかけてやってきているが、地域の人から見れば、ぽっと出てきたという印象を与えている部分もある。できる限り地域の将来性とセットにして考えていく。それからその際、確かに学校を再編するということはリスクもあるけど希望もある。逆に学校をこのまま残すということはおそらく希望よりもリスクばかり大きくなる可能性があるということである。私は他の地域でもこのような委員会をやっているが、学校が小規模になって複式になったりすると保護者の中にも、ある程度人間関係を増やしたり豊かな中で育てたいということで他地域に移住したり、入ってくることを躊躇したりする例が相当あるようだ。ある程度まで数が減ってきたときには打って出る。新しい形を模索して先進地域に発展させるということを同時に考えていくのが現実的である。地域にとっても現実的である。地域の方々の心情を察すると今まで自分たちの中心だった学校がなくなるのは寂しい、何とかして残しておきたいというのは心情的によくわかる。それと同時に長期的にみたときは数年間、時期が延びて本当にそれで希望が持てるのかということである。せつかくこれで機が熟してきているのでこの機を逃さずに、よりよい形を目指していくのがひとつのゴールである。そのような想いである。

(委員)

適正化によって新たな魅力が出てくるということをきちんと打ち出していけるものになればいいと思う。一つは地域の将来性というもので、努力次第で流入人口の増に繋げていくためには、その視点は欠かせないだろうと思うし、子育てという言葉であれば幼・保という視点も入ってくると思うので、そういったところの魅力が島田の教育の中にみえるような形になればいいと思う。もう一つ政策的なインセンティブという言葉で表現されているが、これからの子どもたちが生きていくということを考えてときに、子どもたちにどういう力をつけていくのか、こういった形で島田市が教育を進めていくと、こういう力をつけてあげられるというところが見えるような形にしてあげるといいと思う。それはゆくゆく将来、子どもたちが自分で生きていく必要な力になる。戻ってくる場所もあるというようなメッセージになっていてわかりやすいと思う。

(委員長)

教育の論議についてはこの委員会の中で議論はそれほど十分にできなかった。その話は5番の今後のロードマップの中には教育の議論をしていくという形で記しておきたい。実際に見ていて多くの地域を落胆させる原因は、統廃合を受け入れる学校にあるなど感じている。一緒になり、地域が広がったわけだから地域全体を盛り上げていくということがその学校のミッションなんだということを考えてくれない。そこはてこ入れしていく必要があって、そういう学校があれば校名を変更して、新しい学校にすることもあり得る。地域によっては二つの学校を統廃合するとき一旦両方閉校して、新しい学校としてスタートするところもある。今回の委員会では十分ではなかったが、具体的話になったらきちんと話していただきたい。

(委員)

先ほど教育長も言われたように、子どものために何が一番必要ということで、私の住んでいるところは小規模の学校で複式学級が2クラスあるが、その人数で切磋琢磨して、中学に行って大きな学校

に入った時、その子どもたちが自分の力を発揮できるかと考えた時に、小学校の時から大きな学校に入っていたほうがいいのかと言う父兄もいる。子どもたちのためと言うと意外と地域の人も納得してくれる感じがする。昔の学校がなくなると寂しいという気持ちがあるが、今いる子どもたちのためにどうしたらいいのかという話をしないと、今のままでいいという考え方の人は多くないと思うし今後発展的にこの地域の人口が増えていくかどうかというところの問題もある。少子高齢化が全国的に世の中の趨勢であるということ認識しなければならないと思う。子どもが少ないというのは事実だし、若い人が結婚しない。結婚しても子どもを生まない。子どもが減る原因はたくさんあり、増えることは考えにくい。これから増えていくのであればこのような考え方にはならないと思うが、今、世の中がこのままでいいのかなと思う。全体的に見ても世の中に問題があると思う。その辺りを考えて今、委員長が言ってきたような方向で進めるのがいいと思う。地域が小さくて精神的な教育が遅れていくと取り残されてしまうのではないかと心配も出てきている。

(委員長)

地域の方々も困ったと思っても、そのエネルギーを次の形をどうやって作るかというところだけで向けられていくような、他地域のように住民と教育委員会の間で対立が起こってそこでエネルギーが消費されるようなら、次の形にエネルギーを使っていけるようにしたいと思う。方向性としても骨子の中で出していきたい。4番(学校再編のたたき台)の地域主体のコミュニティと環境づくりの中で。他に基本的な考え方として加えておくことがあれば意見を欲しい。

(意見なし)

(委員長)

その先の議論もあるのでこれについては、現時点でこの形で進めたい。もしなにかあれば教育委員会に連絡してくれれば、その意見を反映することができる。これで終わりということではないので検討してほしい。

それでは4番に進めさせていただく。この学校再編のたたき案は、この手の問題が一人歩きして、いろいろな問題が起こりやすいので慎重に慎重を重ねて対応していかなければならない。それぞれ北部地域で3つ、初倉地域で2つ、私の方で可能であるようなプランを考えてみた。これをどういった形で中間報告等に載せるかということも議論してほしい。この時点で無理とかあきらかに難しいというものがあれば削除することも可能だし、複数案を出しておくことも可能である。複数案出すということはメリットとデメリットがあってデメリットとしては、その後議論が紛糾する可能性が強いということが事実としてある。一方でメリットとしては複数案出てきていることから慎重に議論を進めていくことができる。この最終報告がどうなるかということは置いておいても中間の段階である程度複数案出して、その上でオープンな形で議論を重ねていった方がその後、地域を巻き込んでいくためにも必要であろう。北部地域、南部地域、1回ずつ委員会を開催したがやっぱり具体案がない中では話にくいということもあるので具体案を持って地域の方で話し合いをおこなってもらいたいと思う。いかがだろうか。

(委員)

準一体型小中一貫校と分離型小中一貫校の違いは何か。

(委員長)

分離型というのは瀬戸谷のように小学校と中学校が別々にあって、だけどカリキュラムが小中一貫

教育をやっているものをいう。一体型小中一貫校は義務教育学校だけではなくて小学校と中学校が同じ敷地にあるものをいう。準という言葉をつけたのは第一小と第一中のように目と鼻の先にあるような学校。一つの敷地ではない。これは準一体型と言ってもいいであろう。だからカリキュラムとしては、ほぼ一体校のカリキュラムが可能であるけれども、敷地としては分かれている。義務教育学校というのは小学校と中学校自体がなく、校長が一人で小学校と中学校が一体になっているものをいう。第一小と第一中の場所は義務教育学校にすることもできる。全国の趨勢としては小中一貫教育を行う自治体というのは増えてきている。これを形にするということは島田市の特色づくりには役に立つかなと思う。難点は第三小が二つに分かれて入っていることである。それがあつ限り市として全面的に小中一貫教育を行うことは難しい。つまり小学校と中学校のカリキュラムは連動するわけで、小学校が二つに分かれて入ってってしまうということは、その中学校区が二つ同じカリキュラムをやっていないといけないということになる。第三小の問題は長期的に出てくるだろう。その部分を考えて第三案ということであれば全市的に小中一貫校はできるようになる。もう一方で校地の問題であるとか第二小、第三小がそこに関わってくるという問題は難しい部分ということもある。

(委員)

10年後とかもう少し先にいくと北部の小学校の人数が1学年20人前後である。そう考えると案1というのはどうか。

(委員長)

北部の再編案1というのは私も、皆さんに伺いたいのがこれは一体型にまとめるのは制度上可能だが、まとめたところで相当小さい中学校である。それでこれも案として実際どこにどうやってやっていくのかなとイメージすると、まあ難しいだろうなと思うが案として残しておいたほうがいいのかどうか、案2と案3だけにしておいた方がよいか、私自身判断がつかかねるところである。

(委員)

一つに絞るより複数出しておいたほうがいいと思う。案1は将来的に人数が減っていくことを考えると難しいかなと思う。裏面(南部)は同じく一つに縛らない方がいいと思う。

(委員長)

裏と表の違うところで初倉南はまだ適正規模を保っている。だからやるにしても2段階ということが考えられる。案2をとれば未来永劫、案2のままでなくて将来的には案1に移行していくことも考えられる。そこは多分、教室増という問題は出てこないので大きな問題はないだろうと思う。ただ初倉南の方が体制として一緒になった方がいいということであればそれは案1も考えられる。資料1の方の案1のはどうでしょうか。A委員どうでしょうか。

(委員)

私は伊太だが、いただいた資料で5年後位で中学校も1学級20人位になってしまう。その数字を見ると再編案1は難しくなると思う。ただあくまでもこれは伊太、相賀、神座、伊久美がこれから先、人口が減っていくという案だと思う。まず根本的に伊太、相賀、神座、伊久美が自分たちの地域に人を呼び戻すところの努力をまず、しないといけないと思う。a市の視察には行けなかったが、a市は合併統合して、かなりの小学校の数が減った。その減ったことによる地域のパワーバランスがどうなったのかなと思う。もし再編案の1ではなく2、3になった時、多分親の立場から考えるとなるべく学校の近いところに住みたいという考えになると思う。そうすると今の現状で若い人が少ないのにこれ

を（統廃合）行うことによって更に相賀、神座、伊久美、伊太もそうだが若い人は減っていくと思う。そうなった時に今度は地域を維持できないという大きな問題が出てくると思う。なので子どもたちのことを考えるというのは、もちろん1番で考えると思うが、子どもたちたちのことを考えるならまず最初に親の立場で考える、親の立場で考えるということは、その自分の親たちの地域を守っている、その方たちの考え方であったり、これからどう維持していくか考えていかないと、合併することで子どもたちは人数が増えて少人数よりもいい教育を受けれるのは間違いないと思うが、その結果、地域が維持できなくなってしまうたら、本当に取り返しがつかなくなると思う。実際のところ再編案1は難しいと思う。ただこれを無くしてしまうと地域が維持できなくなる可能性が大きくて出てくると思う。伊太の中に部落があるがその部落で子どものいる家が2軒しかない。しかし神社を4つ維持していて奉仕作業もあるが、子どものいる家庭が2軒しかないので先のことを考えると維持できなくなるということを考えると、数字だけで判断していくのはちょっと怖いところがあるのかなと思う。私はPTA会長をやって子どもたちのためにやるというのは、まず親が子どもたちのためにやってあげようという気持ちの改革だと思う。なので伊太、相賀、神座、伊久美というのは長い時間をかけて人数が減ってきているので簡単に人を呼び戻すというのは難しいと思うが、まず、各それぞれの地域が若い人を呼び戻すというところももう一度島田市も含めて考えていかないと、すごくいろいろなところで不具合が出て大変になるのではないかなと思う。

（委員長）

もっともであると思う。

（委員）

ただ伊太小は第一小に近いので、第一小に行っても距離的な問題はない。

（委員長）

伊太も奥（温泉）のほうは距離がある。

やはり同時に考えていかなければならないことは案をつくりながら、実際に伊太、相賀は集落の入口に学校が位置している。だから拠点みたいなところが無くなって、その奥の人が入ってきにくくなるのは、何としても避けなければならない。伊太は隣に公民館があって活動が活発である。学校がもし統合になれば、何倍ものスペースが手に入る。そこで積極的にやっていく。例えば第一小と一緒になれば、第一小の活動の一部を伊太の校舎でやってもいいかもしれない。クラブ活動とか陶芸とか。なので特化した施設として、それを分散型で持っておくのも考えられる。それらも含めて考えておかなければならない。それを書いたのが4番の「学校再編計画の策定にあたり留意すべきこと」である。もう一度説明すると、新学校をどのような形にしていけば地域にとっていいだろうかと考えた時、地域住民が希望すれば校名を改称した上で原則として新たな学校としてスタートする。そこに住む結果、通学のためにバスを運行して、安全でそれほど時間もかからずに通学することができる。新学校においては地育・夢育のような「在り方検討委員会」で報告された内容を先進的に進めていく。それから原則、同一児童生徒の持ち上がりとして、教員の交流も含めた小中一貫教育を展開していく。教育課程特例校や特認校の活用も考えられる。地域住民を取り込むコミュニティスクールのしくみを取り入れていく。それから先ほどの残った校舎をどうするかということで特に地域の拠点として機能をどうやって残していくかということについていくつか案が考えられる。一つは余裕校舎という法令用語はないが、一つの学校として考える場合には、校舎を残すことは不可能ではない。第一小の一つとして

伊太校舎、神座校舎、相賀校舎というようなことも出来ないわけではない。それでも学校全体を維持しようとする、財政的にもたないで校舎の一部を耐用年数がくるまでは学校施設としてそこで学校の特別活動や部活動などをやっていく。それを中心に特に北部の方は教育課程特例校として地域と密着した教育を行っていくことを売りにして一定期間、住民参画を取り入れた時間を設けていく。例えば今まで陶芸教室などを開きたくても開けなかったものをできるようにしていく。後は放課後子ども教室や児童クラブのような学校教育活動の一環ではないが子育てに関わる様々な取組というものを地域でやっていく。これをやるとカリキュラムは全体の中でやった後、子どもたちはその地域まで来てそこで児童クラブ等を展開していく。そうすれば保護者も近くに迎えに来ることが可能になる。利便性は十分確保できる。それから学校には施設が残るのでコミュニティルームといって地域の人が使え残した施設を残したり、校庭の一部を児童生徒と一緒に農作物を栽培できるようにしたり、こども食堂という実践が全国に広がっているが、これを各学校の家庭科室に小規模な改装で行うこともできる。例えば児童生徒の図書を一箇所に集めてテーマ図書館のような形にして土日であっても学習室のような形で開放することもできる。それから特に湯日は可能性が大きいと思うが子育て世帯向けの住宅地化にして基金化することができれば新しく流入人口が増える一つのきっかけにすることもできる。このように余裕教室の後世活用と新学校の特色づくりができるだろう。何を言いたいかというと、学校が統廃合になって札が1つだけ建って〇〇学校跡地になるわけではない。きちんとその学校を生かすようなことを市民ぐるみで考えていく必要があるということ強調しておくことが重要である。そしてこのたたき台と一緒に報告した上で次の学校を模索していく形をとっていくのはどうか。制度としては不可能なことはない。地域の方々がどれを選択していくかは地域の判断であり地域に議論を委ねることになる。こうしたことをやっていけば、新しく入ってくる方々もこの地域は子育てを手厚くやってくれる地域だと思うし、施設のにも学校の送り迎えも心配せずに済むし、地元には学習拠点が残るということである程度、人口減に対峙していくことができると考えている。

(委員)

また伊太の話になってしまうが4番、5番のコミュニティ・ファームやコミュニティ食堂というのはすごくいいと思う。伊太は奥の方に市営住宅がある。でもすごく古くなっていて、何軒住んでいるかわからないが、そこをうまく活用すればまず人を呼べる場所は可能になる。自分が個人的に考えているのは伊太を低所得者の誘致に特化したモデル地域にできればいいと考えている。それは市営住宅なので金額的には安く入れるようにしてもらい、その方たちに入ってもらい更に住みやすくなるような地域全体を巻き込んだモデル地域のようなものができればいいと考えている。そうするとこのコミュニティ食堂だったり、土地があるので農業をやったりということもできる。若い人たちが活動できる場所も提供していきたい。私も自分で仕事をしているがやっぱり若い人が起業して何かをやるのが難しい現状になっている。そういうところを地域として手助けできるような、全部を巻き込んで一つの何かをやるようにしていけばいいと考えている。付加価値が出て活用も活きてくる。伊太の市営住宅をきれいにさせていただき、新しくしてもらえるように提案ができるように長い目で考えている。

(委員長)

そのような想像力を地域に働かせられるかが一番のポイントだと思う。これら一つ一つについて、できることを言うことができても、地域の方で(市に)やってくださいと言っても市はとてそのことはできない。空間があることは事実である。起業したい人は、例えば学校の跡地を使って陶芸の

展示場だったり、子ども対象の教室を開いたりすることもできる。ただできるということ自体、イメージをほとんどの方が沸いていない。それをどうやって盛り上げていくかということがそれ以降の一番の課題になっていくと思う。A委員のような発想がうまく生きるような形ならいいが。市営住宅にしても全部建て直すお金は出ないけれど、新しい人が入ってきたときにいろいろ手伝うことは可能であるし、バスで通って教育もしっかり受けられるようであればそれは十分入ってくる人もいるだろう。

(委員)

学校は教育の場であると同時に地域の防災災害の拠点でもあるところが殆どであると思う。統廃合によって、その場所が災害拠点として使えなくなるという可能性もあると思う。実際に災害が起きたとき一番力を発揮するのは中学生。子どもたちが災害時の避難所での運営の力になるため、災害拠点となりうるところが教育の場になるような形を謳うべきかなと思う。自分としては地域を守るため、地域を衰退させない、現状維持にするためにも災害に関してもふれておくべきだと思う。統廃合によって、今までの学区から離れてしまうが、あくまでも地元の子がその地区を守るというのはあると思うので、その辺りも含めておくべきだと思う。

(委員長)

それはそうであろう。それは是非入れておきたい。余裕校舎の活用について災害拠点としての機能は維持すること。学校以外にそういう施設があればいいが、学校しかないところはそこは維持していくべきだと考える。それから教育についても防災教育というのも全国で行われていて、防災を基に道徳を教えることも始まっている。新学校の特色の中にそういうことも入れておくことができるし、掛川市の原野谷という地域は防災教育を中心にやっていることもあるので、新学校の中の何もかもができないにしても一つの特色として地域の維持や防災についても考えていく。これは新しく新学校の特色に入れておきたい。他には意見があるか。

(意見なし)

皆さんから意見をいただいておりますが、年度末に中間報告をまとめれば、それを市長に報告し、公表することになる。その時点で地域での議論がスタートしていくことになる。一番恐れるのは生産的に議論が向かわないことである。お互いに足を引っ張るような議論になって、とにかく潰すみたいな形になれば地域にとって何もいいことはないし、私も市教委から一定の方向性があってこの形で結論をだしてやってくれと言われていたわけでもない。率直にこの現状を見たとき最大限、地域の振興を図っていくことがいいと思ってやっているのだから、そうした形にうまくいこうか、いかないだろうか、その辺はやっぱり地元の方々の意見を頂きたいところである。この手のことでは100%賛成ということはない。大半の方がこちらの方がいいのではないかと考えてもらえるかどうかである。

(委員)

地域の文化、カルチャーみたいな文言がないが、それはどこに入るのか。

(委員長)

それは前の報告書の中に入っているが、それも入れておくことはできる。それでは地域の文化の継承についても入れておくことにする。笹間が神楽が統合して残ることができたということもあるので入れておくことにする。他にはいかがか。

(意見なし)

他に意見があればまだ反映はできるので、次回までにいただきたい。

次の今後の議論のあり方でロードマップ、再編の計画にあたり留意すること、この2点をまとめて議論をお願いしたい。資料3をみていただきたい。ロードマップについては私もまだ案を出しかねているところがあって本日の議論を聞いて考えたい。ここで出てきたのは一例であって、他にいい方法が代案としてあれば、それは当然考えられるし追求していいと思う。実際に現時点での可能性としての案を出すことができても、実際にどの計画が最もいいかということは当然コストの問題が入ってくる。コストの問題はおおよそあたりをつけておくことはできても実際にはある程度、見てみないと何とも言えないことなので、これについてはきちんと検討していただくことが必要である。この後、各地域の話合いの機会を持ってそれを重視した上で教育委員会の責任で最終的に判断を行う。基本的に学校（教育委員会）として残す以外の資産については、ある程度地元が中心となってその使い方を考えていく。それは放り投げて勝手にやれということではなくて、様々なノウハウやそれを宣伝することは市としてできるであろう。しかしその中身自体は市として運営する余力はないだろう。地元が主体でやってもらう。それ以外に活用できる助成金があって、積極的に応募することができる。資料4に一覧表を載せている。いろいろな助成金を活用することが可能となる可能性がある。財源との問題になるので全てができるわけではないが、同時並行的に考えていくというのが方針である。それからロードマップはいかがだろうか。先ほど教育長から平成30年度に方向性を出したいということになった時、この3月で方向性を求めないにせよ、いくつか出している案の中から一つに絞っていく作業を行っていく必要がある。それをやっていくためには皆からの意見をいただきたいが、私としてはこの委員会だけでは手に余る。多分各地域ごとの事情があるので、北部と初倉・湯日地域それぞれにワーキンググループを立ち上げていただくのがいいのかなと思う。そこで具体的に地元の方々の意見を聞きながら、委員会は委員会として議論を深めていって、原則としては方向を出していく。そのようなイメージで考えている。いかがか。あくまでもこの委員会は決定権はない。決定権は予算に関わることは市長部局と教育委員会にある。ただ当然、公正に議論が進むためにこの委員会があるわけである。いろいろな意見が出てきたらそれを吸い上げた上で、この委員会で議論していくことになる。または教育委員会の意向がそうでなければ、そこは教育委員会の意向が働くところである。私が打ち合わせしている段階ではそのようなイメージで教育長、よろしいですか。

（教育長）

最後に感想として述べさせていただきたい。

（委員長）

想定されるロードマップは立てておいていいはずである。不可欠なのは地元の方々にきちんと説明を申し上げて、希望が持てる形にはどうしていくのがいいか、これが最重要課題である。その上で最終的に結論をいつまでも先延ばしできないのでおおよそ30年度を目途にして一つの結論を持っていく。この点は次回議論いただいてもいいがどうか。

（意見なし）

それでは次回の検討委員会の時に報告書のたたき案を議論していただくことになるが、できればその前に皆さん方に送れるような形をとりたい。それで見えてきていただき、修正を加え、そこである程度方向性が見えればそれを形にして完成となる。あるいは議論が必要であればもう一回検討委員会を開く可能性もある。そのような形で進めたいと考えているがよろしいか。他に意見があればお願いしたい。

(意見なし)

これを持って第5回環境適正化の委員会を終了させていただく。

(教育長)

本日はありがとうございました。いろいろな視点で話をさせていただきありがたいと感じている。特にA委員が話をしたことについては大事にさせていただきたいと考えている。地域に人が入ってくるような手立てを打つ。要するに地域の魅力をどう作るかというところに繋がっていくと思う。湯日の自治会は寺子屋活動や通学支援、特に放課後児童クラブの支援をやってくれている。まさに自分たちの自治会でできることをやるのが子どもたちのためにもなるし地域の魅力にもなっている。私は笹間に4年間住んだが感心したのは笹間の食水協の人たちは子どもたちを招待してハム作りを12月23日に行っていた。今でも続いている。食水協の人たちがミュール液に浸したハムを用意していて燻製ハムの作り方を教えてくれている。楽しみにしている子どもや保護者が大勢いる。できるときにできる活動をしておかないと、高齢化していくとできることもできなくなってしまう。そういう意味では地域に魅力をつくる、地域に人が留まる、地域に人が入ってきてくれる、そういうことを今から取組んでいく必要があるし、そういう意味では、この話合いは地域を考えるきっかけになるかなと思う。今日配布した資料を皆さんから積極的に地域に発信していただいて地域の意見を聞いておく、地域に議論の種を蒔く、そういうことをしていただけると、地域の活性化に繋がっていくと思う。今日は本当にありがとうございました。